# 平成２８年度第１回瀬戸市総合教育会議　議事録

▽日　時

平成２８年９月２日（金）　午後３時から４時まで

▽場　所

瀬戸市役所４階　庁議室

▽出席者（順不同、敬称略）

**【瀬戸市総合教育会議構成員】**

瀬戸市長伊藤保徳、教育委員会委員長加藤髙明、
教育委員会委員長職務代理者梶田俊裕、教育委員会委員松本恵美子、
教育委員会委員加藤智子、教育委員会委員佐野嘉崇、教育委員会委員林みゆき、
教育長深見和博

**【事務局等】**

副市長青山一郎、
経営戦略部長加藤慎也、経営戦略部次長兼経営戦略室長高田佳伸、
経営戦略室長補佐大岩三明、経営戦略室主査杉江圭司
教育部長加藤都志雄、学校教育課長鈴木勝広、学校教育課主幹早川寿、
学校教育課長補佐河内克友、学校教育課専門員谷口塁、

▽協議及び調整事項

瀬戸市における小中一貫教育について
⑴　まちづくりと小中一貫校設立に留意すべき事項
⑵　小中一貫校に盛り込むべき学習項目

▽協議内容

議事に先立ち、伊藤保徳市長から開会のあいさつがなされた。
予定した協議及び調整事項について意見交換を行った。主な意見は、以下のとおり。

**委員**

小中一貫教育について、瀬戸市においては「新しい学校」として市長部局、教育委員会が連携しながら、取り組んでいる。
小中一貫教育は、文部科学省においても「中一ギャップ」として、小学校から中学校への進学における”つまずき”を回避するものとして、積極的に取り組んでいく考え方を示している。
瀬戸市の新しい学校においては、瀬戸らしい小中一貫教育をどのように組み立

てていくのか考える必要がある。
　これまでの瀬戸市の学校教育は、特色ある学校運営・取り組みを積み重ねてきた。県や全国的に見てもユニークな取り組みを積み重ねている。地域とのかかわりも大変重視しており、各学校で取り組まれている。
　瀬戸市における小中一貫教育は、小学校から中学校への途切れの無い教育と考える。“つまずき”を乗り越える９年間を見通した教育カリキュラムが必要であり、瀬戸市の特色を踏まえた新しく、瀬戸らしい小中一貫教育校を進めていきたいと思う。
　小学校５校、中学２校を一緒にして新しい場所で、新しい学校を作るという取り組みは、全国的にも珍しいケースであり、全国の小中一貫校・小中一貫教育のモデル的な形になるものであり、自負心を持って取り組んでいきたいと考える。
　８月１７日には、「第１回瀬戸市小中一貫校施設整備委員会」が開催された。今年度文部科学省の委託事業として、小中一貫校の在り方などの研究を進めるものであるが、市長部局と教育委員会が十分協力して、モデル的な役割を示す学校としてしっかりと検討していきたいと思う。
　こうした状況の中で、ハードとソフト、それから開校までの期間が限られた中でその準備をどうするかを考えなければならない。開校予定地の見学もしたが、各学年の進行に合わせハードもイメージすることが必要である。また、多数の学年が交流するような場、地域の方と触れ合う場などのスペースなども大切ではないかと考える。
　カリキュラムにおいては、学習指導要領による義務教育をきちんと実施していくことは当然であるが、特色ある学校づくりに取り組んできた瀬戸市における新しい学校は、９年間を見通したカリキュラムを立て取り組んでいくことが大切であると思う。
　また、郷土に愛着を持って、これからの社会で活躍できる人づくりを目指していく視点から郷土学習なども大きな柱になると思う。
　文部科学省は、次期の学習指導要領において、低学年まで英語教育を広げようとしているようである。小学校１年生からの英語教育なども取り組んでいく必要があると思う。
　まちづくりの面から見ると、多くの学校をまとめ、新しい形で展開するため、それぞれの地区の方々の思いも集まっている。まちづくりの面における役割も期待されるので、市長とも積極的に議論していく必要があると思う。
　５つの小学校区、２つの中学校区が一つになるということは、それぞれの学校が培ってきた歴史や自治会学区として学校を応援していただいてきたこれまでの取り組みを大切にしつつ、地域を超えて全体としてまとまるよう取り組んでいく必要もあるのではないかと思う。

市長
　象徴的な言葉・キーワードとして、「瀬戸らしいこと」、「小中一貫教育の日本のモデルになるよう、自負心を持って取り組んでいきたい」という言葉をいただいた。
　また、カリキュラムに関しては、「郷土愛」と「グローバル」という言葉について、ご意見をいただいた。「郷土愛」は、偏重でもいけないし、「グローバル」な視点だけでもいけない。これらを合わせた良い形と言うのは、難しいところが

あると思う。
　今まである学校の持っている伝統を大切にしながらも、新しい文化を作っていくような、挑戦的な学校運営、カリキュラムの構成があっても良いのではないかと思う。

委員
　これまで学校訪問をしてきた中で、どこの学校においても、地域の方、自治会の方、各種団体の方と学校が連携して行っている行事があった。これは子どもたちにとってとても大切な学びの場だと思う。体験したこと、体感した経験が生きる力になって、大きくなった時、「ふるさとの役に立ちたい」と思うことにつながっていく。また、遠く離れていてもふるさとを思いながら、たくましく生きていくことにつながり、まさに郷土愛を育むのに重要な場だと思う。
　地域参加型の恒例行事が、子どもたちが住む地域の学校から離れて、新しい学校に通うようになると、地域とのつながりが薄れてしまうのではないかと心配もあるが、つながりが薄れるのではなく、各学区が我がまちを自信を持って外に発信していけるよう、既存の学校を中心としてますます地域への思いを高めていってほしいと思う。
　子どもたちは、学校区が広がるとたくさんの友達ができるので、別の地域のお祭りや行事にも参加する機会ができ、小さな世界から大きな世界に視野が広がる。子ども達の行動範囲が広くなるに従って、子どもたちを通して大人たちも一緒に交流を深め、より良い学校なればよいと考える。
　そのために地域と学校をつなぐ専門的なコーディネーターを配置して、今までと違う新しい知恵、新しい風を吹き込んで進めていくことも大切と思うので、このような取り組みを行ってほしいと思う。
　各地区にある今ある学校が、地域の拠点となり、そこがふるさとの学校になるような姿になると良いと考えており、今ある学校では、これまで通り放課後にはモアスクールを行い、新しい学校から子どもたちが地元の学校に戻ってきて、モアスクールで時間を過ごす。そこでは、お年寄りのケアセンターなども並行して行われ、一緒に過ごす時間をつくる。また、老朽化している遊具などを健康遊具に変えることで、その地域を卒業した人が健康づくりのために学校に来ることができるようにすると、とても素敵な学校になるのではないかと思う。
　小中一貫校で取り組むべき学習項目に関しては、瀬戸市は、地場産業・伝統産業であるやきもの文化と緑の山が多い自然環境がある。これまでも各学校では窯業クラブや絵付け体験の機会があり、ふるさと学習やキャリア教育の時間も持ってきた。例えば、古瀬戸小学校では、長年、水質検査を行ってきて表彰されており、環境教育の時間として、瀬戸にしかできない取り組みをしてきました。こうした取り組みが、地域を離れて薄れてしまうのではなく、新しい学校になっても、学年ごとにスクールバスなど利用して、伝統的にやってきたことをみんなの課外学習として受け継いでいったら、瀬戸市にとっても、私たち大人にとっても重要な取り組みになってくると思う。

市長
　保護者の目線からと、教育委員会の学校訪問を通して学校の現実をよく知っておられる視点からのご意見をいただいた。

意見の中にあったコーディネーターの設置などは、地域と新しい学校、今通っている学校と新しい学校とができることから、子ども達の見聞を広め、授業の効率をよくすることも含めて、コーディネーターの設置は良いではないかと思う。

委員

小中一貫校に関して、このチャンスの波に乗ることが大前提で、３つの大きな流れを推進していきたいと思う。

１つ目は、小中一貫校で小学校１年生から中学校３年まで９学年あることから、異年齢の交流促進を展開していきたいと思う。お兄さんお姉さんの役割を超え、それぞれが、立場を理解して関わってほしいと思う。

教科に関しては難しいと思うが、家庭科や美術などで、役割が発揮できたら良いのではないかと思う。

２つ目は、先生の視点、切り口も大切にすること。

先生にとっても魅力ある学校づくりを考えていかなければならないし、作っていきたい。

先生は、瀬戸市のいろいろな郷土のことを知っている。子どもにとっての瀬戸について知る、他の地域の瀬戸のこともみんなで伝え合うことで、より瀬戸市をみんなで理解すると、「瀬戸に住んでよかった」など、教育アクションプランに掲げる理念が実現されていくのではないかと思う。

先生目線の切り口と、先生も働きたいと思うことで、先生の力がより発揮されるような学校を目指していきたいと考える。

３つ目は、キャリア教育をより充実させた小中一貫校にしていきたいと思う。

キャリア教育の拠点にしていきたいと思う。何か教材が置いてあるとか、そこで職場体験のようなことができるとか、キャリア教育に弾みがつくのではないかと思う。キャリア教育に携わっているが、若い子の面接などをすると、どうしてもコミュニケーションがうまくできない子がいる。ぜひともコミュニケ―ション能力や会社に入ってからの意思決定能力といったところを少しでも小中一貫教育の中で高めることができるような機会があると良いなと考えています。

この３つを主に、いろいろな議論を進め、今後の学校づくりの参考にしていきたいと思う。保護者からの心配事なども聞こえてきており、保護者向け、一般向け、教育委員会から発行されているＱ＆Ａもありますが、子ども達にとってもどんな学校になるかなど心配事があるかもしれないので、ぜひとも子ども達へのＱ＆Ａも作っていきたいと思う。

市長

委員から３点のご意見をいただきました。小中一貫教育をチャンスととらえていくというご意見をいただいた。これは重要な視点だと思う。一つ一つの各論に入ると、実施が難しいこともあるが、いろいろな意見を周知しながら、このチャンスをものにしていきたいと思う。

委員

これからも地域と共にある学校づくりが必要と考える。現在、学校では、教育活動支援、環境設備支援、安全見守り支援など地域の方々による結びつきで子ども達をサポートしていただいている状況であり、さらに、この点も充実させてい

きたい。今後も人と人とがつながる姿を子どもに与えていきたいと思う。
　小中一貫校においても、7校に共通した郷土学習を運営する上で、保護者同士、地域同士が一丸となるように子どもたちを支援していきたいと思う。多くの仲間、たくさんの大人が関わり切磋琢磨することで子ども達の自己肯定感が高められると思う。
　これらを通して、生徒が「生き抜く力」を身につけ、主体的に自分の進路を選択し、決定できる能力を高めることができると思う。
　留意すべき点として、安全な通学路については、現在維持管理課などと調整を進めていますが、地域と共にある学校づくりを進めると、保護者や地域の方々が学校に来訪する回数が増えると思う。そうすると各学校の駐車場、通学路をより安全な環境に整えることも必要である。これからもこうした関係がスムーズに進むよう、私ども委員も関わっていきたいと思う。

市長
　他の委員からもご意見のあった「地域と共にある学校」を築くには、長い時間がかかったことと思う。先輩方のご苦労で地域の方々が学校にかかわっていただいたり、直接的に授業のお手伝いをしていただくなどの関わりは、新しい学校にも受け継いでいきたいと思う。
　学校へ行く地域の人たちの頻度を高める仕掛けなども考えると、小中一貫校の施設も、地域の人たちも使えるようなハードができるとよいと思う。

委員
　盛り込むべき学習項目に関して意見を述べます。ＩＣＴ教育について、平成３２年度に小中学校でもプログラミング教育を必修化することが発表されました。大きな転換期となるため様々な課題が発生すると思いますが、新しくできる小中一貫校では、目覚ましく発展してきている情報社会の流れにそって、ＩＣＴ機器をそろえた教室で、全校生徒が正しい基本操作から、さらに一歩進んでプログラミングまで、専門性の高い教育が体験できるような教育環境を整えることが必要だと思う。
　学校跡地の活用については、現在、少子高齢化や核家族化が進み、社会における人間関係が薄くなってきており、幼児から大人、障害者の方々のための生涯学習施設などが考えられる。
　また、高齢者の多い地域では平成２８年度から要支援１、２の方々は助成制度が止められ、行き場を失うと聞いている。家に閉じこもっていては足腰も弱るので、今からボランティアの皆さんを養成し、過ごせる場所を提供し、体力や健康維持・増進のための憩いの場にするといった活用の方向性もあると思う。地域事情がそれぞれ異なるが、伝統文化、コミュニティ活動、人と人とのつながりが弱体化しないように各地域の要望を聞き、地域づくりをしていく必要があると思う。

市長
　プログラミング等いわゆる情報化社会に対しての早い段階からの取り組みについてご意見をいただいた。ＩＣＴ、ＩＯＴなどにも関わるご意見と思う。
　現在、瀬戸市の南菱野にあるデジタルリサーチパークセンター施設において、プログラミングの初歩の初歩となる事業を行っている。小学校４、５年生が半日

でプログラムを作ってしまうほどで、子ども達の習得率はびっくりするほどに早い。ロボットのペッパーなどの操作、スマホを使ったゲーム等遊びの世界からの取り組みですが、前向きにとらえると、瀬戸市の次なる基盤産業の担い手になりうる人育てとなるのではないかと思う。

また、現在小中一貫校の対象となっている学校跡地をどう利用するかは、大変大きなテーマであり、一朝一夕には決められませんが、瀬戸市全体の公共施設のあり方について議論を積み重ねている最中であり、これと連動して進めていきたいと思う。

委員

隣接学校選択制について述べたいと思う。

平成１８年にスタートした隣接学校選択制度は、瀬戸市の教育レベル向上につなげていきたい、瀬戸で学んでよかった、瀬戸に住んでよかったなどとなるための内容だったと思う。しかし、残念なことに制度が独り歩きし、学校間の格差が生まれてしまったのではないかと思う。教育委員会としてはこの制度を見直し、調整を進めていけると良いと思う。

小中９年間クラス替えが無いという事実もあり、子ども達の良好な人間関係の構築の視点から、例えば隣接学校選択制度によって他の学校の友達を作るとか、歴史を学ぶとか、といったことも非常に大切な視点ではないだろうか。

また、小中学校のみならず、子ども達の通学路の安全についても、維持管理課などとも意見交換をしながら少しずつでも進めていけると良いと思う。

ホームページで見た瀬戸市教育に関するアンケートからですが、隣接学校制度に関しては、６割の先生の賛成もあれば、見直す意見もあります。先生方が安定していなければ教育は進まないので、見直し、調整を早急に進めていきたいと思う。

市長

平成１８年にスタートした隣接学校選択制は、特色のある学校を作ろうという意図もあり、未来創造の事業ができたり、キミチャレ事業がスタートするなどして、それなりの効果があった。少々拡大解釈が進んでしまい、そのために地域の子ども会が崩壊したということがあったとも聞いている。

１０年前に作った時の原点に返り、小中一貫教育を考えるときに、学校区と自治会連区、各カテゴリをどのようにするか考えなければいけないと思う。連区・学区の考え方をどのようにしていくと良いかを今後十分に考えながら、合意形成をしていかなければいけないと思う。

委員

これまでの意見の中で「小中一貫教育」と「小中一貫校」と言う言葉が出てきた。瀬戸市は「小中一貫教育」をやります、瀬戸市は「小中一貫校」を作ります。それはどのような棲み分けか、狙いなか、何がどう違うのか。地元説明会に行くと、具体的にやろうとしている学校のイメージが分からないなどの意見がありますので、その辺りにも触れて説明をしたい。

教育アクションプラン、それから今回作ろうとしている学校のコンセプトでブレていないのは、「自ら考え、学び、生き抜く力を子供たちに養う」これが一貫

したスタンスです。
　これを具体化していくのが小中一貫校です。小中一貫校に関するこれまでの経緯の一つを話します。
　もともと瀬戸市では、祖東中学校と本山中学校に小中一貫校を作るという発想があった。市の研究指定を受け、それぞれが小中一貫教育連携授業を行った。しかし、適正配置が平成１８年度で頓挫したところから、それぞれの学区が連携を行ったが、小中一貫校が形にならず、次第にその活動が消滅状態になり、現在では、必要な交流を進めているという状況になっている。
　なぜ、こうなったかというと、体制整備と教育活動は一体的なものであるということです。活動だけやると言っても、それを実践するだけの「場」が確保されなければ、それは非常に多くの労力を費やす割に成果が上がらないという結果を導くことになる。
　小中一貫教育についてはいろいろ意見があった。学校が隣りになくても、その学区の中の学校で小中一貫教育を様々な工夫で実践しようと思えばできるが、小中一貫校となると、同じ校舎の中に小学校も中学校もあるといった形態もあれば、同じ敷地の中に小学校と中学校がすぐ隣にあるという形態もある。また、同じ敷地ではないが、一貫校という形であるなど様々な形態があります。今回、取り組もうとしているのは２番目の形態です。
　この形態においては、小学校１年生の子が勉強しているその姿を、職員室から出た中学校の先生が、すぐ目の前で小学生が勉強している姿を見る。空き時間の先生が小学校の授業に行き、小学１年生が何を勉強しているのかをきちんと把握する。中学校３年生がどのような勉強をして義務教育を終わろうとするのかを小学校の先生が目の前で見る。子どもが小学校に入学して中学校を卒業するまで、どのような個人の学びを獲得し、次の教育に進んでいくのかの全体を見ることは、離れたところで実践する小中一貫校では日常的にはできないことだと考える。
　中学校・小学校の複数の先生が一緒になって、小学校の授業を見ながら、ある子について、この点が伸びたと共有し、また、小学校ではできたことが、中学校では苦労しているなど、具体的に日常の中で課題が解決できる環境ができることが今回の最大のメリットです。
　過去にどのように苦労して、又は、良さを持って入学してくるのか、一から把握しなければならないのが現状であり、その子が持っている良さをもう一度中学校で発掘しなければならないのは、子どもの側からすると、先生たちに常に見ていてもらいたいのに、こうしたつながりが切れてしまっていることになります。切れ目のない教育を実現するということは、子どもを小中学校を通して共に見るというステージを作り上げるということで実現できると考える。
　さらに、小中一貫校について、施設に地域の方々が活動する交流スペースを入れることによって、子ども達が小さい時から育ってきた良さを、地域の人たちの目に先生の目を合わせ、そこで子ども達を育てていくことがでる。
　子どもたちの側から見ると、周りの大人すべてが、自分を育ててくれるということから自信を持ち「僕はこういう学びをしてきて良かった。大人がみてくれているんだ。」という思いにつながると考える。これまでの教育システムを今回大きく変えていくという大転換期を迎える絶好のチャンスと自分は捉えている。
　一番大事なことは、子どものそれぞれの学びが保障されているかと言うことであり、これを実現できるよう、今回の小中一貫校で仕組みをつくっていきたいと

思う。
たくさん課題があるが、ぜひ解決しながら進めていきたいと考えている。

市長
再確認を含み、「小中一貫教育」と「小中一貫校」とは、似て非なるものなりと、とのお話しだったと思います。本日は、皆さんに様々なご発言をしていただいたと思います。ありがとうございました。

委員
最後に、児童の安全に関しスクールバスについて意見を述べます。委員の中でも話をしていますが、学区が広がるので児童の安全については必ず取り組むべきこととしてお願いがしたい。その中でスクールバスがあるべきなど、いろいろあるが今後、相談していきたいと思う。事前準備として、来年度から本山中学校と祖東中学校が、部活動を一緒にやるということになっているが、開校を見据えた助走期間にやれることを始めたい。先生が相互に乗り入れることも含めてやっていくことも考えられるので、よろしく願いしたい。

市長
全体の進め方として、現在のところ市が動いている状況について情報提供の一環としてお話しします。
６月２９日に庁内に「モデル地区における小中一貫校の整備推進本部会議」を設けました。具体的にモデル地区における小中一貫校について検討しています。全庁あげて取り組む体制を整え、政策会議メンバーである各部長がメンバーになり、市民の皆さんからの声をタイムリーに伝え、進捗管理をしていくなどしていきます。
開校目標を平成３２年の春としているので、スケジュールとしてはかなりタイトな状況であるが、全庁の力を集めて進めていきたいと考える。
また、進めるにあたっては、広く意見を伺ったり、素朴な問い合わせを受け付けたり、前向きな提案や意見を伺えるよう、教育部の中で窓口を作っていきたいと考える。フル回転で現在進めていることを報告する。

委員.
他の事例実績から、小中一貫教育、小中一貫校での効果は、学力の向上、生徒指導上の問題の解決、指導力の向上、教員の意識改革といった点で効果があるとされている。瀬戸市もこうした効果を目指していきたいと思う。
小中一貫校の考え方のスタートは、本山中学校と祖東中学校でしたが、現状から考え適正規模にしていこうとすると、別々で小中一貫校を作るということでは目標が達成できないとの判断から、中心部を一つとして実践するという方向で考えた。この視点から、ぜひ実現していきたいと考える。

市長
本日用意したテーマに対していろいろご意見をいただいた。
総じて、今の学校教育の良さを活かしながら、挑戦的で他のモデルになるような学校づくりを行ってほしい、行くべきだというご意見とともに、郷土愛の醸成

やグローバルな視点も大切にしていきたいというご意見をいただいた。
　また、時代の流れを先取りして情報プログラミングをやってはどうだというような意見もいただいたと認識した。
　本日は熱心なご議論をいただきありがとうございました。